聖霊降臨後第18主日（特定21）　　2010/9/26

聖ルカ福音書第16章19節~31節
於：聖パウロ教会　司祭　山口千寿

今日の福音書は、「金持ちとラザロ」の物語です。イエスさまが語られたこの物語は、もともとはエジプトに同じような型の民話があったと言われています。金持ちと貧しい人のお話がエジプトにあって、それがパレスチナにまで伝わって行き、それを土台にしてイエスさまがファリサイ派に向かって語られたのが、今日の福音書の物語だと、聖書学者は考えているようです。

エジプトの元々の話は、このような物語です。ある親子が死後の世界に旅をして、そこで見てきたことを話したという設定になっています。

ある金持ちが死んで、盛大な葬儀が執り行われました。同じ時に、貧しい人も死にましたが、こちらの葬儀には参列者が誰もいませんでした。この2人が死後の世界に行ったとき、貧しい人は白い栄光に輝く衣を着て、エジプトの神オシリスの傍らにありました。オシリス神は、この貧しい人に言いました。「あそこにあの金持ちのための素晴らしいお墓があるが、あの金持ちはその墓に相応しくない。あなたこそ相応しいからあそこに行って住みなさい。」金持ちは放り出されて陰府の世界に行かざるを得なかった、というお話です（『ルカによる福音書3』）。

その話がパレスチナに伝わると、主人公が金持ちの徴税人と貧しい律法学者に作りかえられて、人々の間に語られるようになりました。その民話では、金持ちの徴税人が死んで、立派な墓に葬られました。貧しい律法学者も人知れず死にました。そして律法学者の仲間が、ある時、夢を見ると、律法学者はこんこんとわき出る水が流れている楽園にいました。しかし金持ちの徴税人は、別の川岸にいましたが、どうしてもその川の水を飲むことができずに、渇きで苦しんでいたというお話です。これは、律法学者はたとえ貧しくても正しい人だったので、天国でもその義を認められたという話です（『新共同訳新約聖書注解Ⅰ』）。

このような人々の間で語られていた話を土台にして、今日の金持ちとラザロの物語をイエスさまは話されたのでした。

民衆の間で語り継がれてきたことは、貧しい人が死後の世界では豊かな生活を与えられ、この世で贅沢を尽くしてきた金持ちは、死後、苦しみにあうという、逆転の思想です。今の世界では苦しみを受けていても、死後はきっと良くなると、民衆に対して慰めと希望を与える民話です。

このような通俗的な話を土台にして、イエスさまが語ろうとしたことは、何でしょうか。それは、人は神さまの恵みに生きるのだということです。

イエスさまの物語に登場する金持ちは、ラザロのことを知らなかったわけではありません。金持ちが陰府の国から目を上げてみると、アブラハムのふところにいるラザロの姿を認め、アブラハムに呼びかけます。「父、アブラハムよ、わたしをあわれんで、ラザロを遣わしてください」と懇願しています。ですから、金持ちは生前からラザロのことを知っていたわけです。自分の家の前に、物乞いのできものだらけのラザロがいることを知っていたばかりか、ラザロが自分の家の前にいて、残飯

にありつこうとしていたことを認めていたのです。ラザロを家の前から追っ払おうなどとは決してしなかったのです。
このことは、金持ちなりにラザロに対して憐れみをかけていたと言ってもいいのではないかと思います。この金持ちの憐れみの心は、もしかしたらわたしたちよりもず一っと深いものがあったかもしれません。
もし、わたしたちの家の前に、一目でそれと分かる路上生活の人が段ボールで小屋を造って、そこに住み着いたとしたら、わたしたちはどうするでしょうか。毎日、残飯を分け与えるようなことをするでしょうか。おそらく、誰もそんなことはしないでしょう。
数年前に、ある教会の前に路上生活のおじさんが住み着きました。盛り場に近い教会でしたので昼間はそこにいないのですが、夜になると戻ってきて毎晩ねぐらとするのです。その教会の人たちは、見て見ぬふりをしていましたが、そのおじさんに声をかけたり関わりを持とうとはしませんでした。
同じことがわたしたちの教会で起こったとしたら、わたしたちはどのようにするのでしょうか。
今日のこの物語を巡って、あるカトリックの神父さんが、これは総論賛成、各論反対の物語だという意味のことを言っています(『こんな小道もＣ年』)。わたしたちも、貧しい人、弱い立場の人、苦しめられている人にたいして同情したり、可哀想だと思ったり、心配したりしますけれど、自分が身近に関わりを持つようなことになったら、果たしてどこまで引き受けることができるのでしょうか。ラザロの側には犬が来てできものをなめていたとありますが、犬は総論は知らなくてもラザロという各論を決して無視はしないのです。
この金持ちは、ラザロを積極的には助けてやろうとはしませんでした。ラザロのために塗り薬を与えたり、着るものや食べるものを恵んでやることもありませんでした。自分だけが贅沢に遊び暮らしていたから、死後、陰府の世界で苦しまざるを得なかった。それは当然の結果であると、わたしたちがこの物語を解釈するとするならば、わたしたちは、死後、この金持ち以上の苦しみを味わわねばならないことを覚悟しなければなりません。この金持ちよりもわたしたちの方が、ず一っと情け深いと、果たして自信をもって言うことができるでしょうか。
しかし、わたしたちに憐れみの心が一片もないわけではありません。ほかの人の困り果てた状態を見れば、心が痛むのです。自分にできることは何だろうかと、純粋な気持ちから考えることもあるのです。でも、そこから出発する憐れみの行為が、自己満足で終わったり、相手の立場になりきれないことを弁解するためになされるとしたら、初めの純粋な気持ちはいつの間にか不純なものに堕してしまったことになります。ましてや天国の扉を押し開けるために計算ずくでおこなわれるとしたら、折角の純粋な気持ちも、実は大きな誘惑となる危険性をはらんでいると言わなければなりません。
ところで、この金持ちには名前がないのに、何故、貧しいラザロには「ラザロ」という名前がついているのでしょうか。イエスさまはこの貧しい人を敢えて「ラザロ」と呼んだのには、どのような理由があるのでしょうか。通常は逆であると思います。金持ちが世間では名前が通っているのが普通です。世界の長者番付のランキン

グの上位に、毎年、名前の載っている人で、最も有名なのはマイクロソフトのビル・ゲイツ会長だと思いますが、その名を知らない人はいないでしょう。資産家の名前は世間に知られますが、貧しい一庶民の名前など、世間に伝わったりはしないものです。

それを、イエスさまは敢えて、この男は「ラザロ」であると呼んだのです。

「ラザロ」という名前は、ヘブライ語の「エレアザル」という名前を短くしたものです。エレアザルの短縮形がラザロです。その意味は、「神は助け給う」という意味です。神さまの助けによって生かされているのが、この貧しい人でした。

ベタニヤのマルタとマリアの兄弟も同じラザロという名前でした。ご承知のように、このベタニヤのラザロは、死後4日も経ってから、イエスさまによって墓から出てきなさいと呼び出され甦らされたのでした。イエスさまによって生かされた人が、ラザロと呼ばれているのです。

神さまの助けがなければ、人間は生きていくことができません。そのことを本当に知っていたのが、このラザロという人でした。住むべき家もなく、腹を満たす食べ物もない。健康も損なわれており、頼るべき親兄弟もありません。神さまの憐れみのみがこのラザロのいのちを支えたのです。

このラザロだけではありません。わたしたちは皆、神さまの助け、憐れみがあるから生きることができるのです。金持ちは、そのことを無視したのです。沢山の財産が金持ちの目をふさいだのです。神さまのお恵みを見ることを妨げたのです。

金持ちは、死後の世界に行って、始めてそのことに気がつきました。自分には憐れみが必要だと言うことを、苦しみの中で理解したのです。そして自分の5人の兄弟のところへラザロを遣わして、神さまの憐れみに生きるように、悔い改めるようにと説いてもらいたいと、アブラハムに頼みます。

しかし、アブラハムは彼らには、モーセと律法がある。聖書がある。聖書の御言葉に耳を傾けることをしないのなら、たとえ死人の中から甦る者があっても、言うことを聞きはしないと金持ちの願いを退けるのです。奇跡は何の役にも立たない、奇跡を見てもそこに信仰が生まれるのではないと、はっきりと指摘するのです。

その逆です。聖書の御言葉に聞き従うときに、神さまの恵みの出来事、恵のしるしを見ることができるようになるのです。

ある説教者が言いました。この金持ちには名前がない。しかし、もし名前をつけるとしたら、この金持ちもまたラザロでなければならない(『ルカによる福音書3』)。神さまの助け、神さまの憐れみ生きる。それは全ての人に当てはまることです。わたしたちもまたラザロです。神さまの恵みによって生かされているのです。そのことを深く悟るようにと、今日の物語はわたしたちを促しているのです。

この神さまの恵みが、わたしたちの側からは超えることの出来ない大きな淵を超えて、わたしたちを天国の宴に招いているのです。イエスさまの十字架と復活の出来事が、わたしたちが神の国の食事にあずかることを可能としたのです。その幸いにあずからせていただいていることを感謝して、今日も主の食卓に連なりたいと思います。